

雪
の
え

39

北九州市

二〇二三年十二月十九日
門司区親子ふれあひルームにて

伊三未





門司にある「さいわい幼稚園」に通う、2歳の与くん。元気いっぱいの与くんを育てるカラサキアユミさんと潤さんのお話は4ページから。

目次
特集
この街で
育てる

写真=高橋マナミ 題字=牧野伊三夫

4
憧れの港の街での子育ては
一軒の家との出会いから
カラサキアユミさんとその家族
写真=高橋マナミ 文=高橋亜弥子

20
私たち“ほっとさん”です
絵=牧野伊三夫 文=高橋亜弥子

24
横浜から家族で移住
週末がカラフルになりました
前新城志穂さんとその家族
写真=高橋マナミ 文=宮本恵理子

36
ふたりの母と街に助けてもらって
大好きな仕事を続けています
阿川明花さんとその家族
写真=高橋マナミ 文=宮本恵理子

44
北九州の子育て情報
絵=牧野伊三夫

「さいわい」38号
表紙の絵・題字=牧野伊三夫
アートディレクション=有山洋也
編集=高橋亜弥子、宮本恵理子
©北九州2024
印刷=三栄印刷工業（ラズレーション）
無断複製を禁じます。

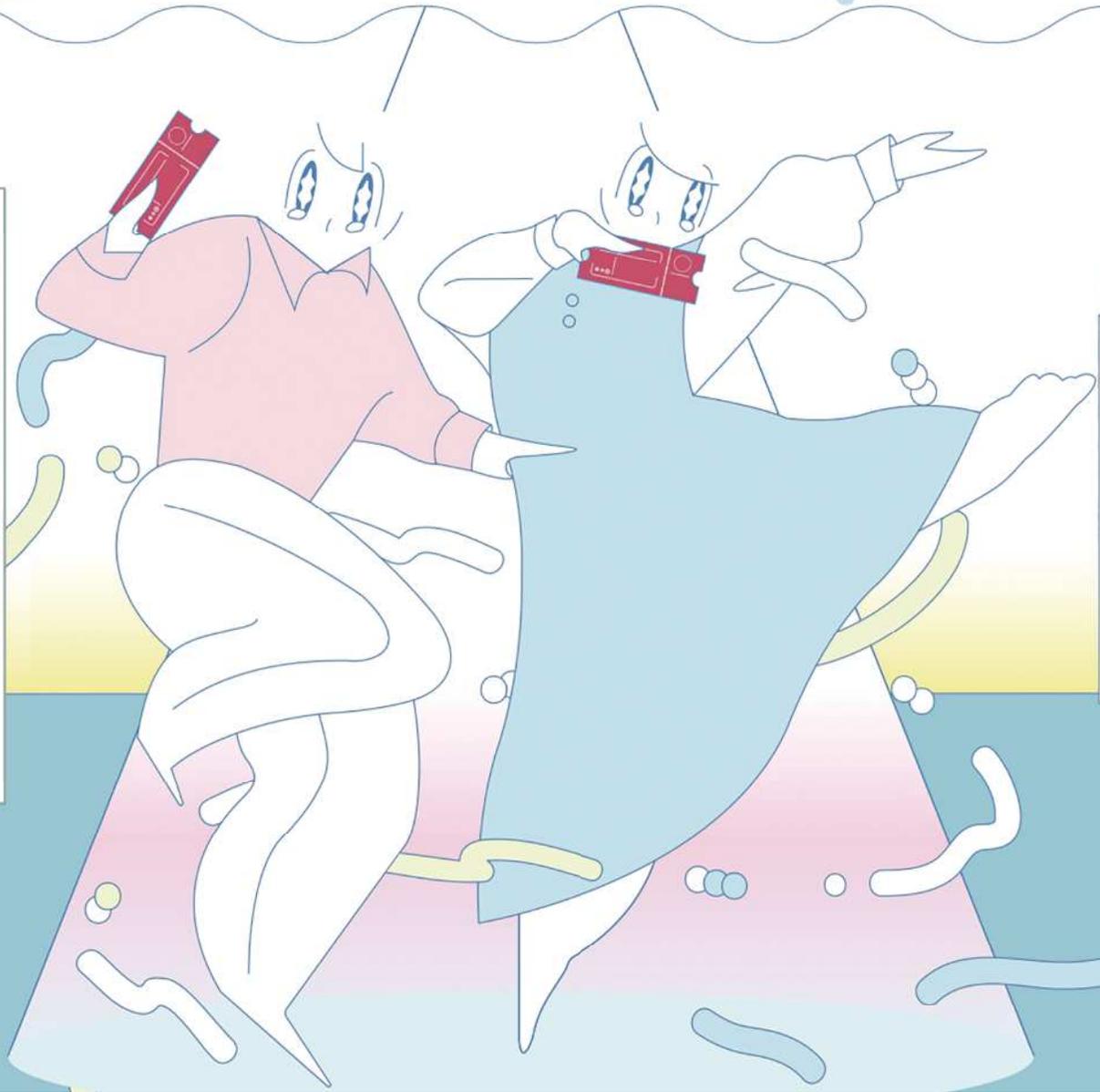
表紙の絵について
タイトル「ごども」2023年刊
子どもたちの、さびしい、無垢な姿は、
両親の半さるる自由な解放、みずみずしく
澄んだした宇宙的世界へ、いざなう力がある。

Teen's ティーンズチケット Ticket

劇場でしか味わえない
「生」の体験をもっと気軽に！

1枚からはじまる、それぞれのストーリー

13歳〜19歳向けチケット



ティーンズチケットとは…
ティーンズと呼ばれる世代のみなさんが気軽に
自分のお小遣いで舞台を観に来られるように、
お手頃な価格に設定したチケットです。



J:COM北九州芸術劇場
KITAKYUSHU PERFORMING ARTS CENTER

特集 この街で育てる

子どもを育てやすい街といわれる北九州市。それはいったいどのような理由からなのだろう。子育ては毎日が大冒険。北九州市出身の人、よその街から移住してきた人、さまざまな背景をもつ3家族の、笑いと涙の子育ての日々を通じて見えてくる北九州市の姿とは――。

写真=高橋マナミ 題字=牧野伊三夫



「さいわい幼稚園」の園庭で遊ぶ子どもたち。地元では、「ワイルド幼稚園」とも呼ばれるほど、毎日、泥んこになって遊ぶことができる。子どもたちは遊びの中から人生に大切なことを学んで成長していく。

憧れの港の街での子育ては 一軒の家との出会いから

文 高橋亜弥子

門司区

カラサキアユミさん(35歳)

潤さん(35歳)

与くん(2歳)

青い空の下、海峡を何艘もの船が静かに行き交っている。大きな船、小さな船。東へ西へ。対岸には下関の街並み。

急勾配の階段をのぼって到着したカラサキアユミさんの自宅を訪れた人は、玄関先から見えるこの光景に、まず目を奪われるはずだ。そして、家の中に入って再び驚く。壁一面の書棚に並んでいる膨大な量の本と、ところどころに飾られている不思議なアートやオブジェ。趣味が彩る宝箱のような家に、アユミさんは夫の潤さんと2歳の息子、与くん暮らししている。

「昔から、海が見える場所で本に囲まれて暮らしたいという思いがあったんですね」

と言うアユミさんの願いそのままのような、この家との出会いから一家の物語は始まる。

アユミさんは北九州市生まれ。小倉で育った彼女にとって門司は子どもの頃から憧れの街であったという。

「両親がドライブ好きで、毎週どこかに出かけるようなアクティブな家に育ちました。門司にもよく来ていたのですが、子ども心に、落ち着いた雰囲気がある港街の門司にはロマンを感じていました。だから、大学を卒業してしばらく関西で働いた後、北九州に戻りたいと思ったときに、門司に暮らしてみたい、と家を探し始めました」

憧れの港街・門司に見つけた一軒家

家探しのために関西から夜行バスで何度も北九州に通って、アユミさんは、この築50年以上になる海を望む古い一軒家と運命の出会いを果たす。そして、なんと、これまで働いて貯めたお金と両親にも借金をして、家を購入してしまうのである。20代で、独身で。とつもない行動力に大学1年生のときからおつきあいしていた潤さんも心底驚いたに違いない。当時25歳のアユミさんは潤さんに言う。

「家を買ったから、一緒に北九州で暮らそう」



カラサキアユミさんは、作家活動をするときのペンネーム。奈良大学文学部文化財学科の同級生だった潤さんと2018年に結婚。2021年与くんが誕生。



茨城県出身の潤さんにとって、北九州は、関西よりもさらに故郷から遠い街になる。でも、「特にやりたいこともなかったから」と、北九州に移り住むことをあっさり承諾。そうして潤さんは北九州にやってきて、地元企業に就職する。「言葉も行動も車の運転も荒い……」と関西の人とはひと味もふた味も違う、職場の「九州男児」たちに最初は戸惑ったというが、3年ほどが経ち、ようやく新しい暮らしにも慣れてきた頃、潤さんは夜の海辺のノーフォーク広場でアユミさんにプロポーズする。結婚後さらに3年が過ぎて、2021年5月に誕生したのが与くんだ。

「勢いで突っ走り、イチカバチかの選択だったのに、北九州に来てくれた夫には感謝です。でも、すべてが順調だったわけではなくて、結婚して、病気や流産で妊娠ができなかった時期もあって、ようやく与が生まれてきました。早産だったこともあり、最初の1年半くらいは子どもを育てることに緊張しすぎて、情緒不安定でした。気持ちがトゲトゲしてまるでハリセンボンです。毎日、夫をサンドバッグのように、当たり散らしていました」

サンドバッグになりながらも潤さんは寡黙に子育てに参加した。煙草もやめたし、もしも急に与くんが病院に行かなければならなくなったときでも、すぐに車を運転できるように、とお酒も飲まなくなった。食材の買い出しや料理も潤さんが担当することが多い。潤さんが働く職場の男性たちは、実家の近くに住むなどして家事も子育ても家のこ

とはすべて奥さんまかせという人がほとんどだけれど、潤さんは、仕事から帰宅後や週末、かなりの時間を与くんとともに過ごしている。

「小倉に両親がいますが、基本的に実家には頼らず、夫婦ふたりで子育てをしています。夫は、料理が上手で家計簿の管理もできて、子育てや家事に全面協力。夫を見つけたことで、私の人生の運はほとんど使ったかもしれない」と照れるアユミさん。一家の平日は、おおよそ次のようなスケジュールで進むという。

朝5時半 全員起床。

6時 潤さん、会社へ出勤。

6時半 与くん、朝食。パンとヨーグルトが多い。

8時半 幼稚園のバスが与くんを迎えに来て、登園。

15時 与くん、帰宅。まだ遊び足りないときは、門司区役所内の「親子ふれあいルーム」に行くことも。

17時 与くん、夕食。

19時 潤さん、帰宅。アユミさんが与くと食事を済ませてしまったときは、潤さんが自分で夕食をつくって食べることも少なくない。洗濯物をたたみ、与くと一緒に風呂、歯磨き、寝かしつけも潤さんが担当。

20時 与くん、就寝。その後、夫婦で映画を見たりすることもあるが、22時には眠たくなり、就寝。

家事は大きく分けると、日中はアユミさん、夜は潤さん、という分担だ。夜、潤さんと与くんが風呂に入っている間、



平日、与くんが幼稚園に行っている間、アユミさんは週に1〜3回、小倉の喫茶店にアルバイトに行く。与くんを延長保育で幼稚園に見てもらう日は、リュックのように背負える形になるベビーカーで園まで迎えに行き、自宅まで歩いて帰る。途中の商店街で知らないおじさんから「これ、持っていくよ」とサツマイモをもらったり、デイケアセンターのバスとすれ違えば、車内のおじちゃん、おばあちゃんたちから窓越しに手を振られたり。街の人に支えられていることを多くの場面で実感するという。

「北九州独特の人情の温かさがありますよね。バスに乗ったときに、与が大きな声で歌うので『静かにして』と注意すると、近くに座っていたおばあちゃんが『元気でいいね』と声をかけてくれたり、高校生が『かわいいですね』と喋ってくれたり。見て見ぬふりをするのが普通なのに、あえて話しかけてくれたりすると、とてもありがたいです」

外出先から自宅に戻るときの最後の難関は、国道からのぼる急勾配の階段。ベビーカーをリュック型に形を変えて、与くんを背負って上がる。自宅の隣の家には、高齢のおばあちゃんが住んでいて、ときどき階段の近くで会ったときには話をする。与くんの機嫌が悪く、ギャンギャン泣き叫んだ日の翌日に「昨日、うるさかったでしょう。ごめんなさい」と謝ると、「なんも聞こえん」と笑われた。

静かな居間でくつろぐ30分間は、アユミさんにとって東の間の休憩タイム。母親にとっては、ほんの少しでも座ってコーヒーを飲むことができる時間は貴重である。

「子どもが生まれてからは、健康的な生活になりました」と笑う潤さんに、アユミさんも頷く。

「ふたりだけのときは、自由気ままに夜更かししたりしていたけど、今は、子どもを中心に、毎日規則正しく、1日のルーティンが決まっています。1週間の過ごし方にも定型ができました。毎日3食きちんとご飯も食べるしね」

北九州の街を新たな視点で

週末は家族で出かける。独身時代には興味がなかった場所も、子どもと一緒にだと新鮮に映るというアユミさん。

「小倉競馬場の公園など子どもをもつて初めて知る地元の子連れスポットがたくさんありました。黒崎や八幡や戸畑のほうにも、子どもと遊びに行けるスポットを探しては、あちこち出かけています」

「でも本当は、土曜日に外出したら、日曜日は家でゆっくりがいいです」

と苦笑いする潤さん。潤さんは家で過ごすことが好きなインドア派。ハツとした顔でアユミさんがフォローする。

「そうでした、そうでした。最近、気がついて『いけん！』と反省して。夫は月曜日から金曜日まで仕事があるから、どこかで休ませてあげないと。日曜日は安息日ですね」

「皆さんのおおらかさと優しさに救われます。小倉でアルバイトをしている喫茶店にも高齢のお客様が多いのですけれど、私が子育ての話をしていたら『私は働きながら6人の子どもを育てた』とか『ケガをしても唾をつけときゃいいよ』と豪快な話をしてくれるおばあちゃんもいて、北九州の人は、優しいだけではないたくましさもあって、強弱のバランスが結構面白いですよ」

子育てお助け場所との出会い

遊んで、走って、転んで、泣いて、笑って、歌を歌って、いたずらして、元気いっぱいかわいいうとくんだけど、子育ての現実にはキラキラと輝く素敵なことばかりではない。男の子を育てる多くの母親と同じように、アユミさんはわん



右ページ/与くんと一緒にリビングで遊ぶアユミさんと潤さん。壁一面の書棚は押し入れを改装してつくったもの。上/アユミさんは『古本乙女の日々』が『古本乙女、母になる。』という著書がある古本蒐集家。子育てをしながら全国の古書店巡りがライフワーク。



右ページ / 「さいわい幼稚園」で元気に遊ぶ園児たち。与くんも年上のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちに交じって木のほりに果敢に挑戦。左ページ / 与くんに見つからないように、こっそり幼稚園にやってきたアユミさん。



ばく小僧に振り回されて毎日ヘトヘト。ときには泣きたくなるくらい疲れることもある。ずっと家の中で子どもと1対1のふたりきりの世界になり、精神的にかなりしんどいときもあったという。

「子育ての本を読んだり、ブログやSNSを見たりすると、親としての悲喜こもごもが綴られていて、『みんなも頑張っている。私も頑張ろう』と勇気づけられました。それでも最初は精神的に張り詰めて、きつかったです」

暗闇に光がさしたのは与くんが生後6カ月を過ぎ、免疫力もついてきて、ベビーカーで近所を散歩するようになった頃。門司区役所に行くと、偶然、「親子ふれあいルーム」という看板を見つけた。

「コロナ禍で完全予約制になっていたのですが、吸い寄せられるように部屋に行き、『すみません、予約していいのですけど……』と恐る恐る扉を開くと、スタッフさんたちが満面の笑みで『どうぞ、どうぞ！』と呼び込んでくださって。半泣きになりながら『私、もう、いっぱい、いっぱい……』と打ち明けると、『いつでもおいで〜！ 予約制やけど、事前に電話してくれたら毎日来てもいいけん』と言ってもらえて、ものすごく安心しました」

まさに救いの神、現る。近所に住んでいるということもあって、それから頻繁に、ほぼ毎日といってもいいほど、門司区役所の「親子ふれあいルーム」に通った与くとアユミさん。

「家にいるときに『ふれあいルーム』にいるときの体感時間が全然違うんです。家で子どもと遊んでいるときは、もう1時間くらい経ったかな、と思うと、まだ15分しか経っていません。やっぱり経たないけれど、『ふれあいルーム』では、スタッフさんやほかのお母さんのお母さんたちとおしゃべりすることもできるからあつという間に時間が経つんです。あそこのスーパのお魚が美味しかったとか、どこの公園が面白いとか、たわいのない話をするだけで、気持ちが楽になりました。SNSで得るものより、何十倍ものパワーがありました」

北九州市内には各区に1カ所ずつ、合計7カ所の「親子ふれあいルーム」があり、専任スタッフが常駐して、0歳から3歳くらいまでの子どもを連れていくことができる。門司区役所3階にある「親子ふれあいルーム」は、北九州市の子育てサポーターのグループ「にじ」が運営。歴史的建造物でもあるレトロな雰囲気の門司区役所の一室は、広くはないけれども、アットホームな明るい雰囲気だ。

スタッフの中島京子なかしまきょうこさんによれば、「まだまだ存在自体が知られていないんですよ。保健師さんからの紹介や、市民センター、病院などに置いてある「ルームニュース」やインスタグラムを見て、少しずつ利用者が増えてきています」

スタッフの方々は、さりげなくお母さんたちに声をかけて、コミュニケーションを図るようにしているという。



右上から時計回り／泥んこになりながら遊ぶ、「さいわい幼稚園」の子どもたち。右から桐原昌子先生、桐原みゆき副園長、桐原奈保子先生。月〜木曜日は園内で調理する給食がある。週2回、購入できる「おたすげごはん」に忙しい家庭は大助かり。





ベビーカーをリュック型に変えて、高台にある自宅までの急勾配の階段を与くんを背負ってのぼるアユミさん。外出時は荷物もたくさん。母は強い。

「その距離感がちょうどいいんです。お母さん同士、無理に仲良くしましょう、という感じではなくて、『最近どう？前にこんなこと言っていたけれど、与くんはどうやった？』とさりげなく、会話に入れてくれる間合いが絶妙で。たとえば、夫に子どももの面倒を見てもらおうとすると、子どもはよく『お母さんがいい』『お母さんと行く』と言いますが、『そこで諦めず、お父さんも同じくらい頼れる存在であることを子育てのライフハックの数々をここで教えていただきました。スタッフの方々が皆さん個性豊かで、中島さんのように包容力のある方もいらつしやれば、ふんわり系の方もいらつしやるし、姉御肌の方もいらつしやる。どのスタッフの方とお会いしても楽しくて。勝手に第二の実家のように思っています」



門司区役所にある「親子ふれあいルーム」で遊ぶ与くん。専任のスタッフが親子共々丸ごと受け入れてくれる。

る未満児クラスがあるとのこと。行ってみたらまさに私のひと目惚れで、通わせることを決めました」

子どもも親も幸せになる幼稚園

「山のあなたの空遠く「幸」住むと人のいう」というカー

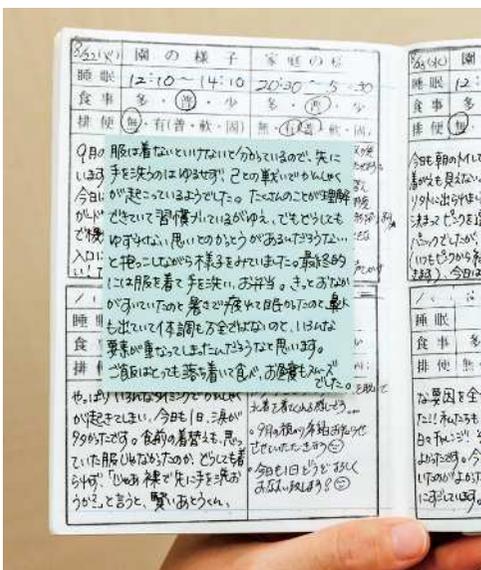
とアユミさんが伝えると、中島さんもうれしそう。

「お母さんは、家に子どもといいたら、イライラしたり落ち込んだりするときもあると思うけれど、スタッフと話したり、お母さん同士で話したりすることで、『子育ては大変

ル・ブッセの詩がある。だけど、与くんが通う「さいわい幼稚園」は山の向こうではなく、商店街の向こうくらい距離。アユミさんたちの家から徒歩20分ほどの場所にある。与くんには内緒で、アユミさんと一緒に、「さいわい幼稚園」を訪ねてみた。

いる、いる！土の園庭で泥んこになって遊んでいる元気な子どもたち。スコップで土を掘ったり、タイヤの上をびよんびよん跳ねたり、ブランコを漕いだり、木によじのぼったり、1歳から6歳までの子どもたちが自由に好きなことをして動き回っている。

「走ったり、のぼったり、持ち上げたり、積み上げたりして、基地をつくる。それができるようになるのは、子どもたちの誇りなんです。タイヤを転がすことは小さな子はできないけれど、一緒に遊んでいるうちに大きな子が転がし方を教えてくれる。小さな子は自分ができるようになるとうれしいし、それを見て、教えた大きな子のほうもうれしくなる。人の喜びを自分の喜びにでき



「さいわい幼稚園」と家庭の双方の申し伝え事項がびっしりと書かれた連絡帳。書くスペースが不足、付箋がつく日も。

るようになって卒園していくんです。優しくしてもらってうれしかった、助けられた、という経験をたくさんすることで、誰かが困っていたら自然と助けることができる子どもになっていきます」

と園を案内してくれた、まっぴー先生こと桐原昌子さん。戦後、プロテスタントの教会で祖父母が始めた家族経営の幼稚園の3世代目になる。祖父母の代は、リトミックや書道など一流の先生が教える規律正しい教育重視の幼稚園だったが、次第に通う園児が少なくなってしまう時期があったのだそう。父母の代に教える教育から脱却。以降、子どもの生涯の幸せにつながる幼児教育を探求し、子どもたちがのびのびと自由に遊びながら学びを獲得していける幼稚園に方向転換した。

「子どもたちがこれから人生を生きていくうえで、自分で選択をして、いかなければならないことがたくさんあります。選択して、違ったと思ったら選択し直すことも大切です。うまくいかなくても何度でもやり直しができること。困ったときには人に頼ること。自分で生きていく力と、共に生きていく力を、遊びながら学んでいきます。たとえば、子どもが手を擦

りむいて血が出ていたら、まずは、子どもに聞きます。「痛かったね。どこが痛い?」「どうしたい?」と。「手を洗いたい」と言えば、洗面所に連れていって、「絆創膏を貼りたい」と言えば、絆創膏を貼る。自分の気持ちを人に伝えてお願ひできるようにすると、子どもたちが成長していくのを感じます」

思いきり外で遊んだ後、園内手づくりの給食を美味しく食べる園児たち。聞けば、毎週火曜日と木曜日は、事前に注文すれば、家におかずを持って帰ることができる「おたすけごはん」という食事提供もあるのだそう。

「家に帰ったら親はバタバタ、子どもはグズグズです。夕方、やらねばならない家事が山積みだと思うのですが、夕ご飯があれば、お母さんはちよつと気持ちに余裕ができますし、ご飯を食べる時間も楽しくなるはず。そうすると、子どもも大人も幸せですよ」

と微笑^{ほほえ}むまっぴー先生。献立表を見せてもらうと、ロールキャベツ、ピーマンの肉詰め、マカロニサラダ……家で作ろうとするとなかなか手がかかるメニューが並んでいる。S200円、M400円、L800円と量によって設定された良心的な価格もありがたい。

「幼稚園に子どもを迎えに行った後にスーパーに買い物に行くのも大変だし、疲労困憊^{ぼろぼろ}で家でご飯をつくるなんて絶対無理……と思う日があります。でも、『おたすけごはん』がある火曜日・木曜日は気持ち楽です。注文した料理を

受け取りながら、お母さん同士、『助かるわ〜』『助かるよね〜』と言いつつ。皆さん食事に対しては同じように悩みを抱えているんだな、と束の間の同志感が生まれています」

とアユミさん。どの家庭でも子育ては大変だ。困ったときには、周りに助けを求めてもいい。「自分の気持ちを人に伝えることができるようになると成長する」と、まっぴー先生も言っていたではないか。きつと、大人も子どもも同じなのだ。アユミさんが笑顔で言う。

「私は子どもが生まれる前までは、あまり人と関わりをもたたくないと思うタイプだったんですけど、子どもが生まれてからは、知らない人ともよく話すようになりました。北九州に住んでいる人たちの情の厚さに触れて、心が開放されたのかも。『ふれあいルーム』で出会った他県出身のお母さんにも『北九州って独特ですよ。私も内気でこんな人と話す性格じゃなかったのに、なんだかかすこく話しています』と言われたことがあります」

大変なことがあっても、この街だったら大丈夫。笑って、「きつと、なんとかなる」と思えてくるから不思議だ。なによりも、太陽を抱いているかのような明るいアユミさんが母親だから。わんぱく盛りの与くん、これからのように育っていくのだろう。ヤンチャになる? スポーツ好き? それとも父親の潤さんに似てオシャレ好きなインドア派? 北九州弁を話し始めるのも、きつともうすぐ!



子育てを助けてくれるのは、家族や親戚、友人だけではありません。北九州市には「ほっと子育てふれあいセンター」という、子育ての支援を受けたい方に、支援をしたい方をご紹介して地域の中で子育てを応援する会員制の組織があります。生後3カ月から小学校6年生までの子どもを預けたい人は「依頼会員」になり、自宅や安全な公共施設などで子どもを預かることができる人は「提供者」になります。センターの本部が希望に合わせて両者をマッチング。依頼会員は忙しいとき、体調が優れないとき、リフレッシュしたいときに、提供者に低料金で子どもを預かってもらえます。子育て中の人で、自分の子どもを預かってほしいときもあれば、時間があるときにはよその子どもを預かることもできるという「両方会員」になることもできます。子どもを預かる提供者の方々は、子どもに関する研修を受けて活動を始め、親しみを込めて「ほっとさん」と呼ばれています。

私たち “ほっとさん”です

北九州市には保育園や公共施設以外にも子育て中の家族を支えてくれる人たちがいます。“ほっとさん”と呼ばれる、子育て家族の心強い味方をご存じでしょうか？

絵=牧野伊三夫 文=高橋亜弥子

八幡東区の高尾加代子さんは、**“ほっとさん”**。歴7年目のベテラン会員。介護福祉士として20年以上勤務しながら、子どもをふたり育て、現在はホテル業の仕事をつつ、月に3〜4回、1歳の女の子を自宅で預かっています。

「自分の下の子どもが大学生になって時間にゆとりができたので、ホテルの仕事しながら、地域の子育て支援を始めてみようと思ったんです。研修は、子どもの心や身体のこと、栄養のこと、小児救命救急など大切なことを専門家の先生から学ぶことができます。子育て中の依頼会員の方も参加するので、研修中はいろんな方とお話ができるのも楽しいですよ」

と高尾さん。依頼する側、提供する側、どちらも仕事をしているのが、今の時代ならではのバランス感覚といえるかもしれません。お互いにビジネスライクではなく、ゆるやかに地域の子育てを支え、支えられる優しさを感じられます。

「高尾さん、このようなご依頼の方がいらっしやいます



高尾加代子さん
2013年12月20日
伊三夫



大串千帆さん

二〇二三年十二月二十日

伊三未

が、支援できますか？」と本部から連絡が入るので、ホテルの仕事のシフトが調整できる時には、依頼者の方と面談します。もし、私ひとりでは難しいときは、もうひとり「ほっとさん」とふたり体制で支援することもあります」高尾さんの夢は、いつか、預かっていた子が成長した頃に再会して、「わあ、大きくなったねー」と言うことなのだそう。近くの街に住んでいたら、きっとそういう日が訪れることもあるに違いない。

初孫が生まれたことを機に、「ほっとさん」を始めたのは、戸畑区の大串千帆さん。

「去年、北海道に住んでいる娘が子どもを産みまして。1カ月間ほどお手伝いに行っていたのですが、毎日、すごく楽しくて。北九州に戻ってきて、たまたま市政だよりを読んでいたら『ほっと子育てふれあいセンター』の記事が掲載されていて、提供会員として登録しました。3年ほど前に体調を崩して長く勤めていた仕事を辞めたのですが、元気になってきたし、ここからまた新しい人生が始まった感じがす。偶然、孫と同じくらいの月齢のお子さんを預かることになって、もうかわいくて、かわいくて。最初に会ったときは人見知りして泣かれたのですが、最近は、慣れてきてくれたみたいで、毎回預かるのが楽しみです」

と、笑顔で語る大串さん。月に2〜3回、1回3時間。小さな子を預かって触れ合ううちに、自分が若かった頃の子育てを思い出すこともあるのだそう。

「自分が子育てをしているときは無我夢中で、本当に余裕がありませんでした。でも、今ならば、もちろん安全第一ですけれど、より心穏やかに子どもを見ることができません。娘が遠くにいるから余計にそう思うのかもしれないが、今、必死で子育てをされている若いお母さんたちには、『大丈夫だよ』『頼ってもいいんだよ』と言ってあげたい。私が若い頃の子育て中にこの制度を知っていたら、利用していたと思います」

ほっとさんの活動を通じて、自分自身の人生の捉え方にも変化が生まれてきたという大串さん。

「研修でお会いするほっとさんの先輩の方々や『ほっと子育てふれあいセンター』の本部の方々がいいつも笑顔で明るくて前向きなんです。こんな雰囲気の人たちに私もなりたいたいと思います。『大丈夫、大丈夫』と言われると、なんだか私も安心できる。これまで『こうあらねばならない』と思うことが多かったのですが、もっとおおらかであっていいのかな、と。学ぶことがたくさんあります」

おふたりの話を聞いていると、「ほっとさん」の活動がビジネスでもボランティアでもないことに気づかされます。子どもと触れ合い、近隣の家庭の子育てを支えることで、大人も学び、喜びを見つけられる。支えられる方も支える方もうれしい、北九州市の「地域の力」と可能性を感じる活動です。

横浜から家族で移住 週末がカラフルになりました

文 宮本恵理子

小倉南区

前新城志穂さん(24歳)

諒平さん(25歳)

陽斗くん(5歳)

柚月ちゃん(3歳)

一諒くん(1歳)

「住めば都、にするしかない。家族で移住を決めたときには、そんな覚悟でやってきたんですよ。でもやっぱり、ここで子育てをすると決めてよかったなって思います」

サッパリと飾らない話しぶりが気持ちのいい前新城志穂さんは、神奈川県は横須賀の出身。普段は、北九州空港内のラーメン店「山小屋」で働きながら5歳の陽斗くん、3歳の柚月ちゃん、1歳の一諒くんを育てる3児の母だ。

「前新城」という珍しい姓のルーツは、夫・諒平さんの出身地、沖縄・与那国島。左官の仕事を求めて上京した諒平さんと、横浜で建設業の事務職をしていた志穂さんが出

会ったのは5年前の19歳の頃だったそう。2年後に結婚したとき、すでに志穂さんには2歳になったばかりの陽斗くんと0歳の柚月ちゃんがいた。

若くして突然「2児のパパ」になった諒平さんと、二人三脚、一生懸命子育てをしてきた。その2年後にはふたりの間に一諒くんも生まれ、にぎやかな5人家族に。しかし、「家族だらん」を楽しむ余裕はまったくなかったという。

千葉や茨城など遠方の仕事に呼ばれることが多く、「家族の寝顔しか見られない日々」が続いていた諒平さん。一方の志穂さんも保育園がなかなか見つからず、復職もできないまま、生活は苦しくなるばかり。ママ友をつくりたくても、首都圏の都市部で出会うママにはひと回り以上年上の人も多く、気軽に悩みを打ち明けられる関係は築けなかった。

実家には通える距離だったが、経済的に助けてもらっていた事情もあり、頻繁には頼れない。マンションの隣人とは挨拶程度でほとんど交流もない。長男の陽斗くんには発達の支援が必要だと分かり、療育のための公立施設に通うことになったが、予約がとれるのは半年先と言われた。

「孤独でしたね」。志穂さんは当時を振り返りながら、ぼ



諒平さんの職場にほど近い小倉南区に借りた一軒家の前で。移住して初めての冬、初めての雪。記念すべき日に家族揃っての写真をパチリ



幼稚園が大好き！柚月ちゃん(3歳)。制服もとっても似合っています。

「ゆくゆくは自分も工務店を立ち上げたい」という夢を抱いていた諒平さんにとって、その選択は夢をかなえる近道にも思えた。まずは単身、北九州に向かうことにした。「家族全員で引越せるほどのお金はなかったから、横浜でひとりで子育てするつもりだったんです。でも、あの生活の先にどうしても希望が見えなくて。思いきって家族で

子どもひとりにつき100万円

つりと言った。

明るい将来を描けず、不安を抱える若い夫婦と3人の子どもたち。そんな家族のもとに、転職は訪れた。

北九州市で工務店を営む諒平さんのお兄さんから、「職場が人手不足だから、こっちで働かないか」と誘われたのだ。

「ゆくゆくは自分も工務店を立ち上げたい」という夢を抱いていた諒平さんにとって、その選択は夢をかなえる近道にも思えた。まずは単身、北九州に向かうことにした。

「家族全員で引越せるほどのお金はなかったから、横浜でひとりで子育てするつもりだったんです。でも、あの生活の先にどうしても希望が見えなくて。思いきって家族で



6

「北九州の街中を週末にドライブすると、何かしらの行事に遭遇する」と志穂さん。この日は公園のお祭りに消防車がやってきて、子どもたちが大はしゃぎ。

北九州に行こうかと思っただけれど、貯金ないから無理だよねーって諦めかけていたら……」

何気なくスマホを眺めていた志穂さんの目に飛び込んできたのが、全国の自治体で広がる「移住支援金」の情報だった。もしかしてとネットで調べてみると、ビンゴ！北九州市でも、要件を満たした首都圏からの移住者に100万円を支給する制度を推進していることが分かった。「しかも」と志穂さんの語気は強くなる。

「支援金100万円に加えて、子どもひとりあたり100万円の子育て世帯加算も決まったんですよ。人数に上限なし！太っ腹でしょ、北九州市！」

もちろん、お金が子育てのすべてじゃない。でも、お金で解決できることはたくさんある。支援金を元手に、引越しや家を借りるための資金の算段もついたことで、一気に移住は「現実」に近づいた。

とはいえ、本当に生活ができるのか不安があった志穂さんは、格安で住居とレンタカーを利用できる「お試し居住」の制度を利用して、2週間ほど市内に滞在。その間に候補となる住居を探し、子育て関連施設も見学した。

諒平さんの起業準備を手伝いながらも、いつかは自分の仕事も再開したいと考えている志穂さんにとって「託児」の問題は大きかった。横浜では10万円かかると言われた入園料が数千円で済むと聞き、経済的な理由で諦めていた幼稚園に通わせることもできそうだと希望が見えた。



元気いっぱい！陽斗くん(5歳)はもうすぐ小学生。幼稚園でも人気者です。

相談に行った幼稚園の園長先生は、親身になって志穂さんの話を聞いてくれた。「子どもたちの枠を空けて待っていますよ」という言葉が、最後のひと押しとなって移住を決断。孤独な子育てを続けて固く縮こまっていた志穂さんの心が、フワフワと柔らかくなった。「子育てはひとりで頑張るものじゃないよ」と応援してくれる人が家族以外にもいることが、ただただ救いになった。

「子育て移住を検討中の人に、『お試し居住』の利用はおすすめです。街中で実際に生活しながら、どんな環境でどんな人たちに囲まれて子育てをするのか、イメージがつかめるので」

新しい街で、新しい生活を家族で始める――。希望と不安で胸をいっぱい膨らませながら、2023年の春、一

家は北九州市にやってきた。横浜から1000kmの距離を15時間かけて、夫婦で車の運転を交代しながらやってきた。関門海峡を越える前に休憩した壇之浦パークینگエリアで、「海の向こう側が、これから暮らす街だよ」と伝えたとき、陽斗くんがピカピカ笑顔を返してくれた。

ふらりと立ち寄っても遊べるから楽

あれから8カ月。前新城家は北九州で初めての冬を迎えた。初雪が本降りとなり、屋根や軒先の木々が白い帽子をかぶった12月下旬の朝、小倉南区の自宅を訪ねると、「いらっしやい。さむ〜！」。一諒くんを抱っこした志穂さんが迎え入れてくれた。

一家が暮らす家は、賃貸の3LDK・2階建て。横浜では夢のまた夢だった一軒家だ。光熱費・駐車場代込みで10万円という家賃だから手が届く。ゆとりのある間取りの家の中で、子どもたちも階段を駆けのぼったり、畳をゴロンと転がったり、今のおうちが大好きだ。

この日、仕事が休みで在宅のはずだった諒平さんは、雪の影響で緊急の仕事が入ってしまったそう。陽斗くと柚月ちゃんは、幼稚園のクリスマス会に参加中。その幼稚園も家のすぐ近くなので歩いていける。子どもたちの帰宅を待っている間、事前にプリントしておいた家族写真を並べ、「写真に記録した思い出話してほしい」と志穂さんをお願いすると、それはそれはたくさんのエピソードが溢れてきた。

写っているのは、週末に家族で出かけた市内のお出かけスポット。下曽根の「キッズランド」の屋内遊具施設で、ド

ライブを楽しむ柚月ちゃん(写真①)。小倉の「チャチャタウン」の屋上から新幹線を眺める陽斗くん(写真②)。自然に近い環境でのびのび過ごす動物たちに出会える「到津の森公園」で、柵よじのぼろうとする陽斗くと柚月ちゃん(写真③)。大迫力の恐竜模型が人気の「いのちのたび博物館」で、負けじと「ガオーツ」のポーズをする陽斗くと柚月ちゃん(写真④)。その帰りに恐竜柄の傘を買ってもらってご満悦の陽斗くん(写真⑤)。お祭りの一角で消防士のコスチュームを着てピースサインを向ける家族5人(写真⑥)の中で、一諒くんのカメラ視線もバッチリ決まっていますね。おや？ 船の上で「海上保安庁」の制服を着た隊員さんと敬礼ポーズで写った陽斗くんも(写真⑦)。ここはどこですか？

「門司のほうまでドライブに行ったときに、大きな船が停まっているのが見えて。たまたま催しをやっていたみたいで、飛び入りで参加しました。北九州市は海も山もあって公園も広くて、親子向けのイベントがこちらで開催されているから子どもたちも毎週のように楽しんでいきます。花火大会、今年だけで何回行っただろう？ 本当にお出かけが増えました。横浜では人混みで子どもたちがグズったり、記念撮影をするにも長い列に並ばないといけなかったりしたけれど、北九



州ではゆとりがあるからめっちゃ楽です」

駐車場代や高速料金が安く、移動のコストがかからないことも、家族のお出かけが充実するポイントに。車に乗って家族で出かける頻度が増し、前新城家の行動範囲は移住前と比べてぐんと広がったそう。

小さな子どもが3人いると、「危険はないか」「迷惑をかけるか」「お金がかからないか」と何かと神経をすり減らしがち。でも、この街なら特別な計画を立てなくても、行く先々で家族がリラックスして楽しく過ごせる。

「こうやって写真を並べてみると、なんだか週末がカラフルになったかもって感じますね」

中でも定番のお出かけは、曽根東臨海スポーツ公園への

よく遊びに行く下曽根の
キッズランド US。雨の
日でも遊ぶことができる
場所があるのがいい。



小倉城に行ったのはもう
2回目。これは市役所に
移住の申請を出しに行った
記念すべき日に撮影し
たもの。



横浜から北九州に移住する
ときに渡ってきた関門橋。
横浜から車でずっと走り続
けて、九州上陸目前！ 爽
やかな海と空のブルー。



移住して8カ月の間に、スマホにたまっ
た写真は膨大に。移住前と比べて、
空、海、山の自然が背景にある写真が
増えて、色彩がにぎやかになったそう。



電車が大好きな陽斗く
ん。チャチャタウン小倉
の屋上から新幹線を眺め
る。小倉駅ではユニーク
な車両の列車と出会う
のも楽しい。



陽斗くんは来年から小学
生。イオンモールでラン
ドセルを注文。



到津の森公園。森の中に
動物園があって、「キリ
ン、いるかな〜」とみん
なで探しているところ。



あまりの夕陽の大きさと
きれいさは思わずビビッ
ときて撮影。オレンジ色
に染まる10月の夕陽。

門司のドライブレオとき
に、偶然、お祭りが開催
中。海上保安庁の船に乗
せてもらえた。



「空が生きている！」
と思って撮影。門司の
空。北九州に来て、空
の広さに圧倒された。



ハイハイが力強い一諒くん(1歳)。
お兄ちゃんお姉ちゃんに負けないぞ!



ドライブ(写真⑧)。お昼くらいに家を出て、コンビニに寄ってジュースやご飯を買って、まずは小倉城の裏にある商業施設「リバーウォーク」でお買い物。それからブーンと車を走らせて、公園に到着するのは大体14〜15時くらい。子どもたちが汗だくになるまで遊んだら家に帰って、ご飯を食べておやすみなさい。

北九州の空は生きている!

多彩な写真群の中で、目を引いた写真が1枚。道路越しに空を染めるオレンジ色の夕焼けだ(写真⑨)。
場所は国道10号。季節は10月。手が届きそうなほど大きな夕陽に惹き込まれ、思わず車を停めてスマホに収めた。そんなエピソードを語っていた志穂さんが突然。

「北九州の空は生きている!」
写真の中に探していた答えを見つけたような、弾む声で言った。

「ビルに切り取られたツギハギみたいな空とは全然違うんです。視界の一面に空が広がって、海と山と隣り合っている色もきれいで。北九州で暮らし始めてから、空を見上げるのが楽しくなった気がする」

空の広さや色彩の豊かさだけなら、北九州に負けない街はたくさんあるかもしれない。志穂さんが空を見上げてその美しさを味わえるのは、きっと「気持ちのゆとり」が生まれたからだろう。

そのゆとりの元は、「お金の不安の解消」だけじゃない。「人のあったかさ」も大きいのだと志穂さんは教えてくれた。

「近所の方がすごく親切で、子どもたちにも温かく接してくださいるんです。私が夜中に腹痛で救急車を呼んだときには『大丈夫?』病院に行っている間、子どもたちを見てあげようか』と言ってくれさったり。いつも気にかけてもらって本当にありがたいです。陽斗を30分だけ留守番させないといけないときに『何かあったら、そちらに行かせてください』とお願ひできたのも安心できました。『志穂ちゃん、玄関の鍵、差しっぱなしだったから預かってるよ』ってLINEをもらえたことも(笑)」

町内会の掃除当番やお祭りにも積極的に参加して、近所に知り合いもたくさんできました。広くなった自宅にママ友を呼んでのバーベキューも楽しかった。

胸を張って、自分たちの足で

もうひとつ、「ゆとり」を感じられる理由が、子育てを支える街の基盤の厚さだ。

移住して間もない頃、一諒くんが喘息で緊急入院が必要になり、慌てたことがあった。首都圏の都市部では病院のベッド不足から「たらい回し」となることも珍しくないが、北九州ではすぐに手続きが進んだ。小倉医療センターと北九州総合病院という市内でも先進的な医療施設2カ所に入院でき、落ち着いて治療を受けられたことに安堵した。

陽斗くんの発達支援についての相談も、1カ月に1度のペースで予約ができるように。以前よりもきめ細かく療育

が受けられるようになった結果、「みるみる状態がよくなった」そう。途中入園となった幼稚園でも人気者で、毎日楽しそうに通っている様子がうれしい。
空を見上げるゆとりができた志穂さんは、将来のことも前向きに考えられるようになった。「子どもたちが通う予定の小学校の近くに家を建てたい」「子どももあとひとり欲しい」——そんな希望を、今は臆せず口にする事ができる。やはりあらためて、お金の心配がなくなったことの意味は大きいのだと繰り返す。

「親に借りていたお金も全部返せたから、母との関係もよくなったんです。生活が楽になって、自然と夫婦喧嘩も減りました。今振り返ると、パパも大変だったと思う。結婚して、いきなり父親になって……。普段はふたりでゆつくり話す暇もないから、今の暮らしをどう思っているか、ちゃんと聞いたことがないけれど、私はよかったと思う。ようやく自分たちの足で立って、胸を張って人生を歩けるま



いのちのたび博物館。
大きな恐竜の化石は
びっくり！ ミュージ
アムショップで恐竜の
傘を購入。



家の中でも気軽に写真を撮る。長女の柚月ちゃん
と一諒くんもすくすくと
元気に成長。



門司港のお祭りでスタン
アラリーに参加。家族で
のんびりと街歩き。



小倉城にある宮本武蔵と
佐々木小次郎の像。志穂
さんは御城印を集めてい
て、小倉城もお気に入りの
場所のひとつ。



でなれたから」

ここで諒平さんが帰宅。お昼休憩もそこに、家族写
真を撮るために職場から戻ってきてくれたのだそう。大好
きなパパの帰宅に、子どもたちもテンションアップ！
壁に貼られた写真

を見つめる諒平さん
に、「家族で出かけた
場所の中で、特に思
い出深いのはどこで
すか？」と聞いてみ
た。諒平さんは少し
だけ考えて「夜景の
きれいだった……あ
れはどこやつけ？」。
すかさず「皿倉山！」。
志穂さんと陽斗くん
のふたりが「お気に
入りの場所」と教え
てくれたのも、ここ
だった。

北九州で過ごす初めての夏の終わりの頃、ケーブルカー
に乗って頂上へ。2022年に2度目の「日本新三大夜景
都市」に認定されたその景色に、家族みんなで歓声を上げ
た。宝石の絨毯から飛び出すようにして、若松方面で打ち



上がる花火もまあるく見えた。

「この街で夢をかなえる」と決めて、そして「この街で育
てる」と決めて、生まれ育った街を離れてやってきた諒平
さんと志穂さん。ふたりの決意を歓迎するかのような夜景
はそれぞれの心に沁みたま

しかし実は、諒平さん
にとって「移住して感じる一番
の幸せ」は、ここに並んだ写
真のどれにも写っていない。
「職場も近くなったから、ほ
ぼ毎日、定時に帰れるようにな
って、家族みんなで夕食を
囲める生活に変わったのがう
れしいです。これから先も
ずっと、ここで家族と暮らし
ていけるんだろうなと思いま
す」

暮らしが、今ここにある。

寒さに負けずバンザイ！ 玄関前に並んで家族写真を
撮った。雪降りしきる空を見上げると、広がるのは一面の
白。何もない白だ。きつとこの家族なら、カラフルな未来
を描けるに違いない。

ふたりの母と街に助けってもらって 大好きな仕事を続けています

文 宮本恵理子

小倉南区

阿川明花さん(28歳)

登生さん(28歳)

初衣ちゃん(1歳)

「わが子に愛情を注いで育てたい。でも、好きな仕事も続けたい」

子育てと仕事の両立は、女性(今の時代は男性も!)にとって永遠のテーマ。このお題に真直面から向き合っ、家族で協力しながら見事な「子育てシステム」をつくりあげたのが阿川明花さんとその家族だ。自身も2歳から通ったヤマハ音楽教室で週3日、ピアノ講師として働きながら、1歳3カ月の愛娘・初衣ちゃんを育てている。

夫の登生さんは、外資系企業で働くITエンジニア。北九州市出身で同い年のふたりが結婚したきっかけは、8年前の成人式での「再会」。学生時代にヤマハでアルバイトをしていた登生さんの顔にピンときた明花さんが「受付の人ですよね!」と声をかけ、写真を撮って連絡先を交換した

のだそう。5年の交際を経て3年前に結婚し、2022年9月に初衣ちゃんが生まれた。

小さな頃から音楽が大好きで、教える仕事も大好きな明花さん。産後はできるだけ早く職場に復帰するつもりだったが、「時間の融通がききやすい仕事」と判定され、希望の時期に保育園に入園できなかった。悩みに悩み、登生さんや両家とも相談して出した結論は、「みんな育てよう!」。家族一丸となって、働き方改革ならぬ「育て方改革」に向けての大作戦が始まった。

3つの世帯で子育てローテーション

ミッションは、明花さんが火水土曜の週3日働きながら、安心して子育てできるための体制をつくること。

ステップ1。まず、博多まで通勤していた登生さんが、小倉にオフィスがある会社に転職した。もともと登生さんは「仕事も大事だけれど、家族も大事にしたい」という価値観の持ち主。明花さんの妊娠が分かった時点で転職活動を始





在宅勤務でも集中できるよう、リビングと個室の間に廊下がある間取りを選んだけれど……お仕事中のパパに、どうしても会いに行きたい初衣ちゃんでした。



め、転勤なし・在宅勤務OKで、柔軟な働き方ができる会社を選び、「家族ファースト」に備えたそう。

ステップ2は引越。登生さんの転職に伴って、ふたりの実家がある小倉南区へ転居。両家とも連携をとりながら子育てする環境の基礎固めをした。住まい選びでは間取りにもこだわり、ポイントは「リビングと個室の間に廊下を挟むこと」。在宅勤務中の登生さんが仕事に集中しやすいようにという配慮だったが……（上写真参照）。

そして、要となるのがステップ3。両家の親も味方につけて、編み出したのが「子育てローテーション」だ。明花さんの勤務日に合わせて、火曜は登生さんの母、水曜は明花さんの母、土曜は登生さんという「3世帯シフト」を組んで初衣ちゃんを預かってもらう協力体制を整えたのだ。

両家の母はふたりとも50代でバリバリ働いている現役だが、「子育てを頑張ろうとする若いふたりのためなら」と快く引き受けてくれた。

土曜日担当の登生さんも、いたって自然体でその役割をこなしている様子。その秘訣はどこに？ よくよく聞くと、日頃から夫婦で連携して「慌てない、迷わないための子育てシステム」が構築されていた。

その隙のなさは、阿川家のキッチンをのぞけば一目瞭然。「頑張りすぎて疲れないように、離乳食は全部レトルトを使うって決めてるんです」と見せてもらった棚の上段には初衣ちゃんが「すでに食べたことがあり、アレルギーの心配

がない製品」、下段には「食べたことがなく、リスクがある製品」を収納している。登生さん担当の土曜の午後は小児科の診療時間外なので、上段を使うというルールだ。

また、日中の食事や排泄の状態などの記録は「業務終了報告書」ばりに、すべて時刻つきでLINEで報告し合う。ささいな体調の変化も共有して早めに対処するからか、初衣ちゃんはまだ一度しか熱を出したことがないそう。

街の頼れる施設も週2で利用

子育て以外の家事分担も、お風呂に入れるのは登生さん、お風呂から上げて髪を乾かしてミルクをあげるのは明花さん、その間に登生さんがバスタブを洗う……と流れるように夜に寝ついた後は、「夜泣きあやし担当」を明花さんが引き受ける代わりに、夜間に使った哺乳瓶を翌朝に消毒するのは登生さんと、どちらかに負担が偏りすぎないようにチームワークが完成している。

「私が几帳面な性格なので、ちゃんとルールを決めるほうがストレスなく過ごせるんです」

明花さんが真面目なことは、隅々まで整理整頓されている部屋の様子からも見てとれる。産後間もない頃、不慣れな子育てでやや神経質になってしまった時期もあったという。「子育てローテーション」が確立する前のことだ。

そんなときに知って以来、頼りにしているのが、小倉北区にある「市立子育てふれあい交流プラザ」。通称「元気の



もり」。大人も童心に返るような楽しい木製玩具がもりばめられた広々とした屋内施設で、雨の日も風の日もいつでも遊べる。自由に食事ができるスペースもあり、入室管理や衛生管理も行き届いている点も安心できる。

初めて行ったその日に初衣ちゃんが夢中で遊ぶ様子に、迷わずファミリーパスポートを購入（年間3000円、4人まで利用可能）。自宅から車で30分かけてでも、週2回は通うお気に入りスポットだ。

同じフロアのふらりと立ち寄りそうな一角には、親向けの子育て相談窓口も。最近では祖父母向けのセミナーも開催している。オープンは18年前に遡り、長く市民に愛されてきた施設だ。

「ミルクをつくるための適温のお湯も用意されているから、魔法瓶を持ち歩かなくて済みます。これだけで荷物が減ってありがたい。行き届いているなあって思います」。取材で訪問したこの日は、明花さんの母、中井由美子さんが初衣ちゃんを迎える準備をして待機中とのこと。取材



登生さんが子育て担当の土曜日には、日中の食量や排便の状態、お昼寝の時間などを細かく記録して共有。体調管理もバッチリ。

班も一緒におじやますることに。

「先生、どうしたかね？」

ピンポーン！「はい」。同じ小倉南区の車で5分の距離のマンションを訪ねると、なんとまあ若々しい。おばあ

ちゃん。が！明花さんと同じ教室で30年以上ピアノやエレクトーンを教えてきたベテラン音楽講師の由美子さんは、阿川夫婦にとって強力な助っ人だ。

初衣ちゃんが誕生すると同時に、ぶつけてケガをしないようにと、家具の配置を大移動して「子育て仕様」に模様替え。薬の空き容器や百円ショップで買った雑貨を利用して遊び道具も山のように。要らなくなった紙をビリビリッと音を立てて破いたり、紙を丸めたボールをつか

んで投げたり。「発達にいいと聞いて、指先を細かく使う遊びをできるだけ取り入れているんですよ」と由美子さん。

「ほらー！ういちゃん、新作だよ。手袋の指を見てごらん。お顔があるよ。この指パット太っちゃパット」

さすが音楽の先生、歌声が美しいこと！テレビに童謡の映像を映しながら、初衣ちゃんも「あーあー」と一緒



写真上2点は、週2回は通う屋内施設「元気のもり」。約1,500㎡と広く、2歳以下専用のスペースも。写真下2点は、祖母の由美子さんと遊ぶ様子と手づくりおもちゃ。ビリビリッと音を立てて紙を破るのが大好き。

に歌い、お尻でリズムをとって遊ぶのが定番の過ごし方なのとか。

明花さんが仕事を終えて迎えに来るまで、長いときで6時間ほど一緒に遊んだり、ご飯を食べさせたり。「水曜日が一番汗だくになりま

場合も少なくありません。長い時間をかけて信頼関係を築き、『第二の母』となつて、深い気持ちで生徒に向き合える先生になつてほしいという願いがあります」

由美子さんの話をじつと聞いていた明花さんも、「たしかに生徒さんへの気持ちは変わつたかも」と語り出した。「いろんな子がいるけれど、みんな一人ひとり、親御さんに愛されてここまで育つたんだなあと思うと……完全に母目線で見守る気持ちが強くなりました。高学年の生徒に対してもつい『しゅごいねー!』(2オクターブほど高い声)と褒めちぎってしまふことがあつて、『先生、どうしたかね?』と笑われます。もつともつと、この子たちの力になりたいと思うようになって



明花さんの弟、高校生の陽翔(ひなた)さんも一緒に。初衣ちゃんに会いたい一心で、水曜日は自転車を本気で漕いで帰宅するそう。

「子育てを理由に好きな仕事を手放すことがないように、娘を応援したいんです。私も20代半ばで明花を産んだから、両立の大変さは分かります。それでも、一時的に生徒さんを減らしてでも、ずっと続けてきてよかったと心から思うんです。音楽教室には10年以上通う生徒さんもいて、学校の先生よりも長いおつきあいが続く

りました」
2世代3世帯でタッグを組んだ阿川家の子育てチームは、今日もクルクルと回り続ける。ひとりの子どもを育てるために、たくさんの方が円に巻き込まれ、さらに大きな円へ。クルクルクルクル。回りながら、広がっている。

北九州市の子育て情報



●子どもと遊びに行くところ

●ソラランド平尾台（平尾台自然の郷）

日本有数のカルスト台地でキャンプやバーベキュー、アスレチックなど1日中満喫できます。
北九州市小倉南区平尾台1-1-1
開園時間：9:00～17:00（3～11月）10:00～16:00（12～2月）／休園日：毎週火曜日（祝日振替休日の場合翌日）、年末年始など／入園料：無料
<https://cocokite-yokatta.jp/>

●山田緑地

小倉都心部から車で約10分。芝生広場でのピクニックや自然の森でバードウォッチングなどを楽しむことができます。
北九州市小倉北区山田町
開園時間：9:00～17:00／休園日：毎週火曜日（祝日の場合翌日）、年末年始など／入園料：無料
<https://yamada-park.jimdofree.com/>

●北九州市立子ども図書館

中央図書館内にある国内最大級の子ども図書館。明るく開放的な空間で時間を忘れて読書を楽しめます。
北九州市小倉北区城内4-1
開館時間：平日9:30～19:00、土曜日・日曜日・祝日9:30～18:00／休館日：月曜日（祝日の場合は翌日が休館）年末年始など https://www.city.kitakyushu.lg.jp/kyouiku/32300001_00005.html

●スペースLABO（北九州市科学館）

「フシギがれ！」をコンセプトにした科学の展示やプラネタリウムの施設。竜巻発生装置は必見！
北九州市八幡東区東田4-1-1
開館時間：10:00～18:00／休館日：年末年始／入館料：大人400円、中高生300円、小学生200円など
<https://www.kitakyushuspacelabo.jp/>

●いのちのたび博物館

全長15m級の恐竜をはじめとした圧巻の展示は、まさに骨格標本の大行進。
北九州市八幡東区東田2-4-1
開館時間：9:00～17:00／休館日：年末年始など／入館料：大人600円、高校生以上の学生360円、小中学生240円など <https://www.kmnh.jp/>

●到津の森公園

森の中にゆったりと動物たちがくつろいでいます。夏休みの「林間学園」は長い歴史があり親子三世代の参加も。
北九州市小倉北区上到津4-1-8
開園時間：9:00～17:00／休園日：毎週火曜日（祝日の場合翌日）、年末年始など／入園料：大人800円、中高校生400円、4歳～小学生100円（※令和6年3月31日まで小学生以下無料） <https://www.itozu-zoo.jp/>

●響灘緑地グリーンパーク

広大な芝生広場に熱帯植物園やポニー広場、サイクリングコースやバラ園などがある。約250頭のカンガルーなどが飼育されている「ひびき動物ワールド」も。
北九州市若松区竹並1006
開園時間：9:00～17:00／休園日：毎週火曜日（祝日の場合翌日）、年末年始など／入園料：[グリーンパーク] 一般150円、小中学生70円、高齢者40円
<https://hibikinadagp.org>

●花農丘公園 北九州市立総合農事センター

1000本を超えるバラや季節の花々、ポニー乗馬などの動物とのふれあい、農業体験やバーベキューを楽しめます。直売所では地元の野菜などを販売。
北九州市小倉南区横代東町1-6-1
開園時間：9:00～17:00／休園日：年末年始／入園料：無料 <https://k-nouji.com/>

●子育てふれあい交流プラザ 子どもの館

子どもたちが、学んだり、遊んだり、体験したりできるインドアパーク。木の砂場やボールプール等わくわくメニューがいっぱい！
【子育てふれあい交流プラザ】
北九州市小倉北区浅野3-8-1 AIMビル3階
開館時間10:00～18:00／休館日：概ね毎月第1・第3火曜日／入場料：子ども100円、一般200円
<https://www.kosodate-fureai.jp/>

【子どもの館】

北九州市八幡西区黒崎3-15-3 COMCITY7階
開館時間：10:00～19:00／休館日：概ね毎月第1・第3水曜日／入場料（フリーパス）：子ども300円、大人500円 <https://www.kodomo-how.com/>

●タコ公園

北九州市民おなじみのタコ公園。市内に11カ所、日本最大級のタコやねじり鉢巻きのタコなど個性豊か。
勝山公園：北九州市小倉北区内4番
昭和町公園：北九州市小倉北区昭和町8番 ほか
<https://www.city.kitakyushu.lg.jp/files/000759428.pdf>

●九州鉄道記念館

明治時代の木造列車や懐かしい昭和列車の展示や本格操縦体験など、親子、3世代で楽しめる記念館。
北九州市門司区清滝2-3-29
開館時間：9:00～17:00／休館日：不定休（9日間／年）／入館料：大人300円、4歳～中学生150円
<http://www.k-rhm.jp/>

●篠崎八幡宮

北九州市の民話にも登場する「蛇の枕石」別名「夜泣き石」は、子どもの夜泣き封じのご利益で知られています。
北九州市小倉北区篠崎1-7-1
<https://www.shinozakihachimanjinja.or.jp/>

●子育てを助けてくれるところ

●親子ふれあいルーム

子育て家庭の親とその子ども（概ね3歳未満の乳幼児）が気軽に集い、交流を図る場を区役所や近接する公共施設、一部の児童館に開設。
問い合わせ：北九州市子ども家庭局子育て支援部子育て支援課 ☎093-582-2410
https://www.city.kitakyushu.lg.jp/ko-katei/file_0263.html

●ほっと子育てふれあいセンター

子育ての支援を受けたい人と、支援をしたい人（通称：ほっとさん）を結ぶ、会員制の子育て相互支援活動。
問い合わせ：北九州市小倉北区浅野3-8-1 AIMビル3階子育てふれあい交流プラザ内 ☎093-511-3081
<https://www.kosodate-fureai.jp/hotfureai/>

●子ども食堂

主に子どもを対象として、無料または定額で食事を提供しています。「多世代交流の場」や「子どもたちの居場所」になっています。
問い合わせ：北九州市子ども家庭局子育て支援部子育て支援課 ☎093-582-2410
<https://www.city.kitakyushu.lg.jp/ko-katei/11700201.html>

●子ども・家庭相談コーナー

状況やニーズに合わせてさまざまな支援制度を紹介し

ます。区役所に行けなくてもまずはお電話で。
問い合わせ：お住まいの住所地の区役所子ども・家庭相談コーナー
☎門司区093-332-0115 ☎小倉北区093-563-0115
☎小倉南区093-951-0115 ☎若松区093-771-0115
☎八幡東区093-661-0115 ☎八幡西区093-642-0115
☎戸畑区093-881-0115
https://www.city.kitakyushu.lg.jp/ko-katei/file_0063.html

●北九州ライフ（北九州市移住応援公式情報サイト）

最新の移住情報、移住支援制度について掲載しています。移住に興味がある方は、まずはこちらをチェック！
<https://kitakyushulife.jp/>

●キッズチャム

ママ友二人が発信する子育て情報サイト。地元愛を感じる内容は役立つ情報が盛りだくさん。
<https://kids-cham.com/>

●第一交通産業 ママサポート・子どもサポートタクシー

妊娠中や子育て中のママの送迎、お子様（3歳～）の送迎など、便利なサポートタクシーが利用できます。
問い合わせ：ママサポート・子どもサポート事務局 ☎093-511-8830
<https://daichikoutsu.jp/taxi/>

●小倉井筒屋 本館7階ベビー・子供服フロア

赤ちゃんのおむつ替えや授乳室を備えたベビーサロンのほか、ベビーカー貸し出しや専門スタッフによるお買い物アドバイスなどお子様連れのお客様が快適にお買い物をお楽しみいただけるフロアです。
北九州市小倉北区船場町1-1
問い合わせ：093-522-2712（ベビー用品）

●西鉄バス北九州 1日フリー乗車券

北九州都市圏内を乗り降りできる便利な乗車券は、大人1枚で同伴小児1名分が無料です。
問い合わせ：西鉄お客さまセンター ☎050-3616-2150
<https://nishitetsu-ktq.jp/>

●シャボン玉石けん ベビーシリーズ

北九州発、今年で無添加石けん*製造・販売50周年。シャボン玉石けんは、デリケートな赤ちゃんの肌やさしいふわふわの泡が健やかに守ります。「オンライン工場見学」なら自宅からお子様と一緒に参加できます。
※合成界面活性剤、香料、着色料不使用。
問い合わせ：フリーダイヤル ☎0120-4800-95
<https://www.shabon.com/shop/list/baby>

夜景の美しいまち 北九州市 の日本夜景遺産



いこう、暮らしやすさの先へ。
北九州市移住応援公式サイト・北九州市公式ホームページ・北九州市観光情報サイト

KITAKYUSHU
LIFE 北九州ライフ

北九州市
CITY OF KITAKYUSHU

NewU
あたらしいことを、はじめやすい都市。
福岡県北九州市。

U・I ターン北九州
KITAKYUSHU-CITY

北九州観光サイト
北九州ぐるりッち!北九州

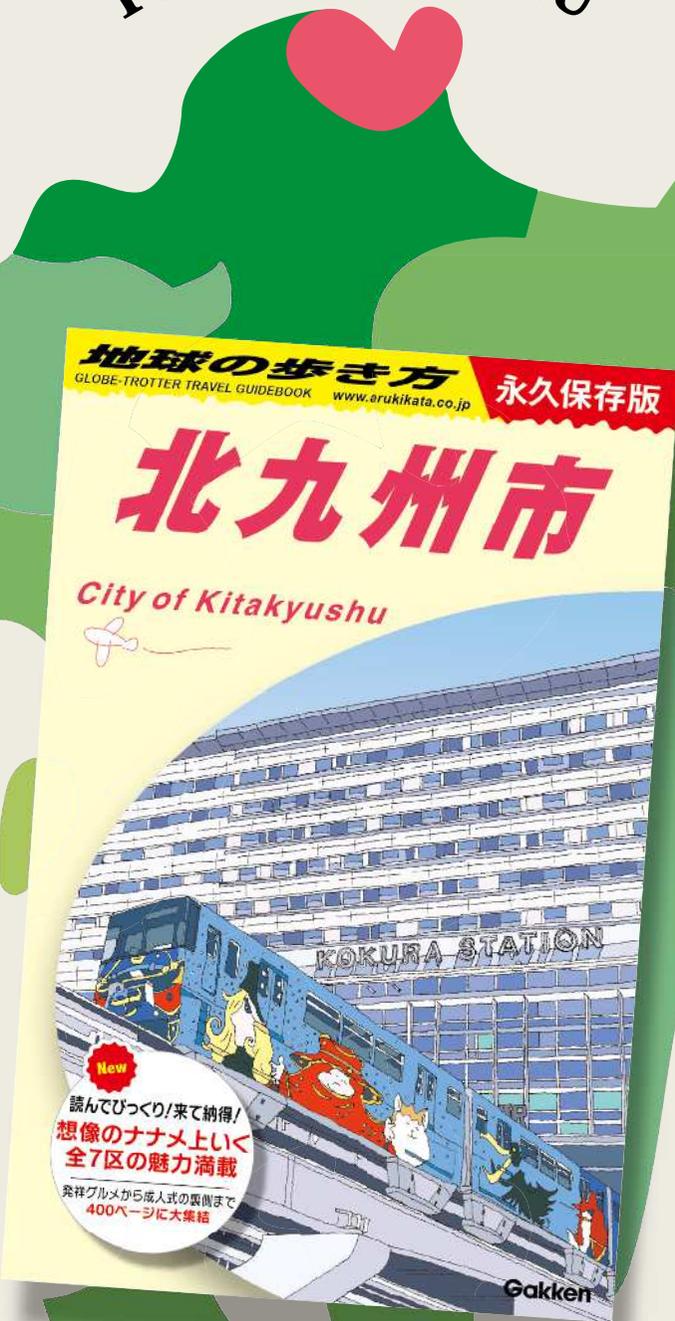
北九州市
公式ホームページへは
こちらから



日本初の「市」版 ガイドブック

全400ページ

TOP of KYUSHU



New
読んでびっくり!来て納得!
想像のナナメ上いく
全7区の魅力満載
発祥グルメから成人式の裏側まで
400ページに大集結

九州のデジッパン

青雲 白雲

※読者プレゼント
はがきをお寄せくださった方のなかから、抽選で20名の方にプレゼントをお贈りします。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。お1人様1号につき1通まで。2024年7月19日消印有効。

A: 新門司港〜大崎南港フェリー
往復乗船券ペア(各門大洋フェリー)各1枚
成金が送景。おつりおつりおつりおつり。
フェリーの旅でしか味わえない味です。



B: 「地球の歩き方 北九州市版」
発行「地球の歩き方」
つる名様
お土産をたくさんいただいたので、
北九州市の魅力をたくさんご紹介する
冊ができました!



C: シャボン玉石けん
ペビキギフト
(シャボン玉石けん)各1冊
つる名様
お土産の枚数が多すぎて、
無事に届かなくてご迷惑が
おかけしました。お詫言わせて
させていただきます。

D: 北九州市立いのちのたび博物館
【自然史・歴史博物館】
親子へア入場券 >10名様
追加の品を届けてくださる方が
多かったので、お詫言わせて
させていただきます。



※読者プレゼント
はがきをお寄せくださった方のなかから、抽選で20名の方にプレゼントをお贈りします。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。お1人様1号につき1通まで。2024年7月19日消印有効。

※読者プレゼント
はがきをお寄せくださった方のなかから、抽選で20名の方にプレゼントをお贈りします。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。お1人様1号につき1通まで。2024年7月19日消印有効。

※読者プレゼント
はがきをお寄せくださった方のなかから、抽選で20名の方にプレゼントをお贈りします。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。お1人様1号につき1通まで。2024年7月19日消印有効。

「雲のうえ」へのご感想、取り上げてほしいテーマ、北九州市への思いなど、どんなことでも結構です。綴じ込みハガキでお寄せください。

次号予告
ただいま編集会議中。



※バックナンバー 在庫無料配布中
(数に限りあり)
◆38号 今日、やきにくだ!
◆36号 開かせてください社長さん。
北九州市の好きなところ、明日のこと
◆35号 北九州家のいただきます。ごちそうさま。
◆32号 すし並1人前から眺める北九州。
◆30号 北九州やきもち豚バラ日記。
その他在庫情報は公式HPにてご確認ください。
◎住所、氏名、電話番号、ご希望の号を明記し、冊数分の切手を同封して下記まで。1名様1号につき1冊。
(1冊 210円分、2冊/250円分、3~4冊 390円分)
〒803-0001 北九州市小倉北区浅野3-8-1-4F
TEL 093-551-8152
北九州市MICE推進課
雲のうえ 送付係
雲のうえ公式サイト 検索



人気旅行ガイドブック「地球の歩き方 北九州市版」がついに発売!

Gakken



※北九州市にぎわいづくり懇話会では、「雲のうえ」への広告掲載企業を募集しております。⇒北九州市 MICE 推進課「雲のうえ」送付係まで

北九州市にぎわいづくり懇話会事務局
11globe@www.kitakyushu.jp

小倉けいりんとボートレース若松の 収益金は市民のくらしに役立っています

たとえば…

若戸大橋。 若戸トンネルの無料化



学校のトイレ。 エアコンの整備

などに使われています！

北九州市公営競技局地域貢献室

北九州市
小倉けいりん

BOAT RACE 若松

